2014年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

明治以降のわが国の学術と芸術の状況を考えるためには、わが国が明治以降今日まで二つのシステムによってきたことをまず知らなければならない。一つは近代化のシステムであり、もう一つは歴史的・伝統的システムとでも呼ぶべきシステムである。前者の近代化のシステムは法制、国政、軍事、教育、郵政などわが国の社会制度のほとんどすべてにわたって欧米に範をとって採用されたものであり、家族制度とその周囲での人間関係以外のすべてにわたるものであった。近代化システムは基本的に文字と数字によって普及していったのである。ほとんどすべてのインフラストラクチャーが欧米化され、近代化されたが、その中で家とその中での人間関係だけは例外とされた。もう一つの歴史的・伝統的なシステムとは近代化されえなかった家とその周辺の言葉や慣習、身振りの世界であり、義理人情や宴会などに象徴される世界である。この世界は一般に「世間」という言葉で示すことができる。

通常はこの歴史的・伝統的システムは近代化を妨げるものとして位置づけられているが、実は歴史的・伝統的システムは多少の緊張をはらみながらも近代化を助ける役割を果たしてきたのであって、歴史的・伝統的システムの助けがなければ近代化も進められなかったのである。この二つのシステムは現在も機能しており、政治家たちの言動の中に(1)ニョジツにみることができる。政治家たちは選挙区においては「世間」の言葉で語り、身振りと宴会の世界にあり、そこでは本音で語ることができる。いわば歴史的・伝統的なシステムの中で生きているのである。(2)彼が国会に出てきたときには「世間」の言葉を忘れ、近代化の言葉で話さなければならない。文字と数字の世界に生きるのである。いわば近代化のシステムの中で話さなければならない。中には国会や東京で「世間」の言葉で本音をもらしてしまう政治家もいる。それを失言というが、その失言によってかえって人気を得た政治家もいたのである。

学者や芸術家も同様であって、大学や研究所などにおいては近代化の用語が幅をきかせ、文字と数字ですべてが表現される。しかし彼が家に帰ればそこでは近代化の用語よりも「世間」の言葉が幅をきかせている。学者や芸術家も政治家同様に二つの言

葉を分けて用いなければならないのである。近代化の用語だけで押し通そうとすれば人情味のないものと見なされ、「世間」の言葉だけで暮らそうとすれば時代遅れの人間だと見なされてしまう。(3)日本人はダブルスタンダードによって生きなければならないのである。ところがこの二つのシステムのうち歴史的・伝統的システムは多くの場合隠されており、表向きは近代化のシステムだけですべてが説明されている。

どうしてそのようなことになったのか。原因は明治以降のわが国の社会的・文化的位置にある。遅れて近代化を図ったわが国には欧米先進国の文化や技術が広く紹介された。軍事技術だけでなく、さまざまな先進的な技術が導入されたが、それらが実地に根を下ろすには伝統的な人間関係との調整が必要であった。(4) 新しい技術を使用した工場が設置されればそこには工員が必要であり、近代的労働市場が成立していない段階においては農村からさまざまな手段で強制的に集めなければならなかった。その際に農村における伝統的な人間関係の協力が必要であった。

近代的な企業であれ、官庁であれ、事情は同様であった。制度としては近代的な構造をもちながら、人間関係の面では歴史的・伝統的なシステムによって運用されていたのである。重要なのはそのことが隠されていたということである。(5) 多くの人はその事実を知っていた。しかしそれは遅れて近代化を果たそうとするために生じた事態であり、わが国の遅れた部分と理解されていた。この百年の間わが国の近代史が書かれてきたが、それらはすべて近代化の視点で描かれており、歴史的・伝統的システムについては遅れとして位置づけられたにすぎなかった。現実に生きて働いている歴史的・伝統的なシステムがこのように無視され、あたかも(6)すべてが近代化の視点で描かれるに至ったのは何故か。

ヨーロッパの学問は明治以降国策として導入され、わが国の学問の中心におかれた。そして国策として進められていた近代化と歩調を合わせて営まれ、自然科学から人文諸科学に至るまで、ヨーロッパの学問がそのままの形で導入された。本来わが国とは異なった社会的、文化的背景のもとで生まれた学問がわが国のように異なった土壌の上に移植されたことによる矛盾は全く考慮されなかった。学問は近代化の実現のために何を置いても進めねばならないものと理解されていた。

このことは、ヨーロッパから導入された学問がまさにヨーロッパにおいて近代化の中心に置かれていたために、わが国におけ

る近代化のシステムを絶対的なものとして意識させる風潮を強化した。その結果わが国の歴史的・伝統的なシステムは表面から追いやられてしまった。しかしどのような近代化の施策も歴史的・伝統的なシステムの助力なくしては実現し得なかったから、建て前としての近代化、本音としての歴史的・伝統的システムという関係が成立することになった。

こうして知識人たちはヨーロッパから導入された学問や芸術に従事し、その限りでわが国の近代化に貢献しているという意識をもつことができた。欧米の学問や芸術を学ぶことになんの疑問も抱かなかったのである。このような風潮は自然科学から人文科学に至るまで共通のものであった。日本の学者や芸術家たちはこうして学問や芸術を営みながら、歴史的・伝統的なシステムから(7)ユウリする結果となったのである。

このような傾向はもう一つの事情によってさらに強められていた。それはわが国の明治以降の教育のあり方である。明治以降わが国の教育体制も近代化された。各地に小学校が置かれ、初等教育から高等教育まで欧米に範をとって整備されていった。教育の内容も近代化に添って定められ、ヨーロッパにおける近代的な社会と個人の関係が理想とされていた。一八七七年には社会という言葉がソサイエティーの訳語として生まれ、一八八四年には個人という言葉がインディヴィデュアルの訳語として生まれた。この社会と個人という言葉はその後わが国で(8)ジョジョに定着してゆくのだが、その内容はヨーロッパにおける社会であり、個人であった。

(9)現実にはわが国の個人はヨーロッパの個人とは決定的に異なっていた。わが国には「世間」という歴史的・伝統的システムが残存しており、インディヴィデュアルの訳語としての個人が生まれたとしても、その個人はヨーロッパの個人とは違って「世間」に根を下ろした個人であった。(10) わが国の学校教育の中でヨーロッパの個人がすでにわが国にも生まれているかのように教えられてきたために、現在に至るまでわが国の知識人もわが国の個人がヨーロッパの個人と同じだと考えている。わが国の教育は近代化に添った形で進められてきたから、歴史的・伝統的なシステムを無視してヨーロッパの概念等を受け入れてきた。個人という概念もヨーロッパでは長い年月をかけて成立したものであるが、わが国ではその近代における姿がすでにわが国にも存在しているという誤解が生まれたのである。それはわが国におけるヨーロッパ学がヨーロッパの学問の成果を無批判にた

だ受け入れてきたその結果でもあった。

ヨーロッパにおいて個人は十二世紀に生まれたとされている。そのきっかけは次のように理解されている。一二一五年のラテラノ公会議において告解が義務づけられるが、告解はその前から秘密の形で行われるようになり、十二世紀にはかなり一般的になっていた。個人が成立するにはまず一人一人が内面を自覚するところから始まる。すでに六世紀から成立していた『贖罪規定書』によって罪のありようが一般的にも知られるようになり、告白によって一人一人が自己の内面を探る道がつけられたのである。あたかもその頃ヨーロッパ各地域に都市が成立しつつあった。それまでは農村で父親の仕事であった農業を継ぐしかなかった子供たちが都市で職人や学生などになる可能性も生まれていた。

こうして自己の内面を自覚した青年たちには自己の人生を都市に賭けるという選択が可能となったのである。こうして個人が成立することになったが、それは同時に恋愛の成立でもあるとされている。個人が生まれたとき、男と女も互いに対等であるという自覚も生まれていた。南フランスにおける宮廷風恋愛の成立である。[11]

個人の基本的性格が確定したことを明確に示しているのは神学者サン＝ヴィクトールのフーゴー（一〇九六―一一四一）である。フーゴーは『ディダスカリコン（学習論）』を書いた。この書物は教育論、あるいは読書論ともいうべきもので、すべての学問分野に関する見解が述べられている。哲学を中心として経済学、財政学、医学から醸造学にいたる広い範囲の学問を対象としている。その中で次のように学問について語っている。

学問のあり方については「謙虚な精神、探究の熱意、静かな生活、黙々とした吟味、貧しさ、異国の地が必要であり、これらは往々にして多くの人に読解の際の解らないところを明らかにしてくれる」。謙虚さの例として「第一にいかなる学知も、いかなる書物も軽んじないこと、第二に、どんな人から学ぶことも恥ずかしがらないこと、第三に、学知を獲得した暁にも、他の人々を蔑まないこと」が挙げられている。探究の熱意については名誉を足蹴にした例や財産を投げ出した例などが挙げられている。静けさや吟味のあり方などについては詳しく説明する必要はないであろう。

問題は異国の地である。それは流謫の地として説明されている。「全世界は哲学するものにとって流謫の地である」という。

「祖国が甘美だと思う人はいまだ脆弱（ぜいじゃく）な人に過ぎない。けれども、すべての地が祖国であると思う人はすでに力強い人である。がしかし、全世界が流謫の地であると思う人は完全な人である。第一の人は世界に愛を固定したのであり、第二の人は世界に愛を分散させたのであり、第三の人は世界への愛を消し去ったのである」。

フーゴーはここで「世間」を否定しているのである。ヨーロッパにも個人が生まれる十二世紀以前には「世間」があった。そのことは『アイスランド・サガ』などを見れば解る。『アイスランド・サガ』には七千名の人名が登場するが、そこには個人の内面の描写はほとんど見られない。サガに見られる復讐の慣行も集団の中での人間の生き方に見合うものであり、いまだ個人は成立していない。サガの人々は「世間」と同様な関係の中で暮らしていたのである。フーゴーはそのような関係の中で生まれた個人のあるべき姿を述べている。フーゴーは自立した個人でなければ学問は営めないとしているのである。

わが国の個人は「世間」の中で生きている。インテリもそれぞれ自分の「世間」をもっている。その自分の「世間」に対してものを書き、発言しているのである。フーゴーはその「世間」を否定し、ヨーロッパのインテリを自立させようとした。その自立は[12]テッテイしたものであった。哲学を中心として学問の全分野を修めなければならないが、そのすべてを修めた上で何をなすべきかも問われている。ある哲学者はすべてを学習した後に陶工の仕事に転じたといわれ、またある学者は靴直しの技芸に習熟していたといわれている。フーゴーの知には読書だけでなく、行動も含まれているのである。ヨーロッパの個人はこのような伝統の中で生まれた。個人が明確な姿をとるにはその後七百年近くを必要としたが、すでにこの段階で「世間」とは[13]カクゼツした個人が生まれつつあったのである。

ところがわが国が近代化の過程でヨーロッパの個人概念を受け入れ、一八八四年に個人という言葉が成立したとき、このようなヨーロッパの歴史的事情は当然ながら顧慮されなかった。個人という言葉が成立してもその実質はいまだ伝統的なシステムの中にあったのである。

（阿部謹也「二つのシステムと日本の学問」による）

注　告解……キリスト教における罪の告白。　『アイスランド・サガ』……アイスランドの民族譚（たん）。

〔問一〕　傍線(1)(7)(8)(12)(13)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　空欄(2)(4)(5)(10)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(2)
A　すなわち
B　それゆえ
C　しかし
D　たしかに

(4)
A　そのうえ
B　しかも
C　ところが
D　たとえば

(5)
A　すなわち
B　あたかも
C　もちろん
D　たとえば

(10)
A　すなわち
B　それゆえ
C　ところが
D　ただし

〔問三〕　傍線(3)「日本人はダブルスタンダードによって生きなければならない」とあるが、次のア～オのうち、ここで言われている「ダブルスタンダード」に従う生き方の実例として適当なものにはA、適当でないものにはBの符号で答えなさい。

ア　経済学者が著書では消費拡大の経済的効果を数式で示し、家族には謹厳実直な父親として贅沢をせずに暮らすように諭す。

イ　プロ野球の監督が一方でマスコミ相手に選手のプレーをぼやき、他方で選手を発奮させて活躍させる。

ウ　農家が一方で最新技術を学んで高級農産物の栽培に活かし、他方で息抜きに一日一箱たばこを吸う。

エ　弁護士が昼間は法廷で法律用語を駆使して弁論を行い、夜は友人たちと酒を飲みながら恥と恩を忘れた世相を嘆く。

オ　取締役が一方で会社の利益拡大のために努力し、他方で一部の株主のために隠れて便宜を図る。

〔問四〕 傍線(6)「すべてが近代化の視点で描かれるに至ったのは何故か」とあるが、次のア～オのうち、その答えとして適当なものにはA、適当でないものにはBの符号で答えなさい。

ア　欧米先進国に追いつくためには近代化を進めるのが得策だと分かっていたから。

イ　ヨーロッパの学問が日本という異なる土壌に移植されることにより矛盾が生じたから。

ウ　ヨーロッパから導入された学問が絶対的なものとして意識されたから。

エ　わが国の近代化には歴史的・伝統的なシステムの助力が必要だったから。

オ　明治以降の教育制度によりヨーロッパの学問がわが国になかなか定着しなかったから。

〔問五〕 傍線(9)「現実にはわが国の個人はヨーロッパの個人とは決定的に異なっていた」とあるが、どのように異なっているのか。「自立」と「義理人情」という語を用いて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

〔問六〕 傍線(11)「個人が成立する」とあるが、次のア～オのうち、ヨーロッパにおける個人の成立にとって重要な要素だと著者が本文中で考えているものにはA、考えていないものにはBの符号で答えなさい。

ア　自己の内面を自覚する。

イ　自分の判断で生き方を選択する。

ウ　人間は生まれや育ちにかかわらずみな平等である。

エ　集団の中での生活を拒否する。

オ　学んだことを行動に移す。

〔問七〕 次の文ア～オについて、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　日本における近代化の用語は表面的なものに留まり、日本人の内面を語る言葉とはなりえない。

イ　近代化のシステムは日本の歴史的・伝統的システムを駆逐しようとしたがそれに失敗した。

ウ　近代化の言葉の背後に隠れている日本の歴史的・伝統的システムを顕在化させ、今に活かさねばならない。

エ　日本においてはあらゆる階層の個人が現代に至るまで内面を自覚することがない。

オ　西洋近代に根差した個人という概念は現代に至るまで日本の歴史的・伝統的システムに定着していない。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

ヨハネ伝福音書の冒頭に、次のような言葉が書かれている。

太初（はじめ）に言（ことば）ありき。
言は神と偕（とも）にあり。
言は神なりき。

ここには言葉の本質が描き出されている。これは、人間にとって言葉なくしてはこの世界は何の意味もなさず、言葉は人間の精神そのものである、という意味である。

ところで、まず最初に言葉があった、とはいったいどういう意味であろうか。

すべての始まりを宇宙の誕生に求めるなら、「太初にビッグバンありき」とでも言うべきだろう。あるいはまた、人類の誕生をもってすべての始まりとするなら、「太初に生命（いのち）ありき」ということにならないだろうか。確かに、自然界（または宇宙）の営みとしてはそうかもしれない。しかし、人間は、単に生命体としてこの世に生まれてきただけでは、「人間」とはいえない。それは動物の一種としての「ヒト」である。「［(1)］」は「イヌ」や「サル」などと同じ動物である。動物にとって、世界の意味はそれほど複雑なものではない。そこには、種としての生命を維持していく上で有益であるか無益または害になるものであるかの二つの意味＝価値しかない。言語哲学者の丸山圭三郎の言葉を借りれば、このような世界の構造は「身分（みわ）け構造」と呼ばれる。本能としての身体で世界を分けるからである。

一方、人間は「身」ではなく、「言葉」によって世界を分節し意味を与える能力を持っている。例えば一～二歳の子供が犬を見て、生まれて初めて「ワンワン」という言葉を発したとき、(2)その瞬間からその子供の意識の中に「ワンワン」、すなわち犬の

存在が生れるのである。もちろん「ワンワン」という言葉が発せられる何か月も前から、その子供の目には時折、犬の姿が映っていたことであろう。しかしそれは、茫洋(ぼうよう)とした外界の一風景に過ぎなかったはずである。ところが「ワンワン」と言葉にしたその瞬間、その茫洋とした外界から「ワンワン」が初めて意味を持った存在として切り取られるのである。と同時に、「ワンワン」と「ワンワンでない物」とが分けられるのである。こうして「(3)」は、種の本能とは別の次元で、次々と「言葉」によって世界を分け、世界に意味を与えていくのである。このようにして分けられた世界の構造は、前述の「身分け構造」に対して「言分(ことわ)け構造」と呼ばれる。言葉で世界を分けるからである。これによって人間は、「真実／真実ではない」「正しい／正しくない」「美しい／美しくない」など、単に生命を維持していくためだけなら必要のないさまざまな価値基準を持ち、さまざまな文化を持つようになったのである。言い換えると、それが人間の(4)たる所以(ゆえん)なのである。

一方、言葉には、すでに存在している事物や観念にラベルを貼る二次的な作用もある。例えば(5)「キャラクター人形の愛称募集」などという広告に見るような場合である。われわれの日常的な感覚からすると、「言葉の役割とは何か」と問われたとき、むしろこちらのほうが答えとして当たっているのではないかと思われるかもしれない。しかしこれは、言葉の表層的な役割に過ぎない。言葉の本質は前者のほう、すなわちわれわれを取り巻く環境世界に意味を見出し、区別し、人間独自の文化を作り出していく働きにある。人間は言葉を持っているからこそ、この外界を意味の豊かな世界として認識することができるのである。すなわち言語は、人間が「(6)」として世界に存在し続ける上での根本をなすものなのである。

北アメリカのイヌイットは、雪の状態を表現する名前を百個近く持っているという。一方のわれわれは、粉雪、ぼたん雪、みぞれなど、雪の降る状態を表すための名詞をいくつか持っているが、積もった状態の雪を表現する名詞はほとんど持っていない。このことは、雪の状態を細かく正確に認知する能力に関しては、イヌイットの言語に熟達した人のほうがわれわれより優れているということを示している。また、虹は七色とされているが、赤橙(だいだい)黄緑青藍(あい)紫の七つの色のそれぞれに対して該当する名詞を持っている言語は必ずしも多くない。たった三つか四つの色名しか持たない言語もあり、そのような言語を使っている人は、色の名詞をたくさん持つ言語を使う人よりも色の識別能力が劣るという報告もある。

つまり、最初から色彩豊かな世界が人間とは無関係に独自に存在していて、後から現れた人間がそれに対して一つひとつ名前をつけていったのではないのである。[(7)]

ご存じフーテンの寅さんの名ゼリフの一つに「数字の始まりが一ならば国の始まりは大和の国、島の始まりが淡路島で泥棒の始まりが石川五右衛門」というのがあったように記憶するが、人間存在にとっての太初(はじまり)はまさに言(ことば)なのである。

（佐野洋子・加藤正弘『脳が言葉を取り戻すとき』による）

注　イヌイット……カナダ北部の先住民族。

〔問一〕　空欄(1)(3)(4)(6)には、それぞれ「人間」または「ヒト」という語のいずれかが入る。「人間」の場合にはA、「ヒト」の場合にはBの符号で答えなさい。

〔問二〕　傍線(2)「その瞬間からその子供の意識の中に「ワンワン」、すなわち犬の存在が生れる」とあるが、ここで言われている「犬の存在」を説明するものとしてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　「ワンワン」という名で呼ばれる特殊な犬。

B　子供に対して吠えかかる犬。

C　他の犬から区別される、かけがえのない一匹の犬。

D　「ワンワン」として他のものと区別される対象。

E　「ワンワン」という言葉。

〔問三〕 傍線(5)「「キャラクター人形の愛称募集」などという広告に見るような場合」とあるが、どのような場合のことか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 環境世界に意味を見出し、区別し、人間独自の文化を作り出していく場合。
B 名前のないものに名前を与えることで世界に新たな意味づけをする場合。
C 意味を持たない対象に名前を与えることで新しい意味を作り出す場合。
D 新しい名前を与えることで、それまで気づかなかった意味を発見する場合。
E 人間にとってすでに意味のわかっている対象に名前をつける場合。

〔問四〕 空欄(7)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A もちろん、色彩豊かな世界はあらかじめ存在しているが、人間はそこにある色彩を一つひとつ発見して名づけていくことで初めて相互に意思疎通ができるようになる。
B 人間が言葉で名づけたことによって世界が意味を持って人間の前に立ち現れ、その結果、人間が「人間」として存在するようになったのである。
C 人間が色彩に一つひとつ名前をつけていくことによって初めて、それまで人間とは無関係に存在していた色彩豊かな世界は人間と結びつけられる。
D 色彩とはあくまでも色の名前なのだから、目の前の花の色は「赤」と名づければ赤くなり、「白」と名づければ白くなるのである。
E 「キャラクター人形の愛称募集」と同じように、色彩豊かな世界は名前を一つひとつ与えられて初めて、それを言葉で言い表すことができるようになる。

〔問五〕 次の文ア～オについて、本文の趣旨に合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　人間が言語を持つのは、単に動物として生命を維持していくためだけではない。

イ　赤色と橙色のような二つの色を区別するか否かは、言語によって異なることもある。

ウ　「身分け構造」だけでは、外界を意味の豊かな世界として認識することはできない。

エ　「ヒト」と「人間」の区別は、言葉と関係なく存在する。

オ　雪の状態を細かに表現するイヌイットの名詞を取り入れることで、日本語をより豊かにしていく必要がある。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

歌は名に流れたる歌よみならねど、理を先として耳近き道なれば、あやしの者の心にも、おのづから善悪は聞こゆるなり。長守語りていはく、「述懐の歌どもあまた詠み侍り[(1)]中に、ざれごと歌に、

(2)火おこさぬ夏の炭櫃のここちして人もすさめずすさまじの身や

と詠めるを、十二になる女子のこれを聞きて、『[(3)]の炭櫃こそ、火のなきは今少しすさまじけれ。などさは詠みたまはぬぞ』と申し侍りしに、かなしく難ぜられて(4)述ぶる方なくなむ」と語りしこそ、げにをかしかり[(5)]。

また、心にいたく思ふことになりぬれば、おのづから歌は詠まるるなり。金葉集に、よみ人知らずとて侍るかとよ。

(6)身の憂さを思ひしとけば冬の夜もとどこほらぬは涙なりけり

この歌は、仁和寺の淡路の阿闍梨といひける人の妹のもとなりける生女房の、いたく世をわびて詠みたりける歌なり。もとより歌よみならねば、また詠める歌もなし。(7)ただ思ふあまりにおのづからいはれたりけるにこそ。

（『無名抄』による）

注　長守……鴨長守。下鴨社の神官。　述懐の歌……身の不遇を述べた歌。　ざれごと歌……冗談めかして詠んだ歌。
生女房……新参の女房。

〔問一〕空欄(1)(5)には、助動詞「き」を活用させたものが入る。それぞれふさわしい形に活用させたものを答えなさい。

〔問二〕 傍線(2)は、「火おこさぬ夏の炭櫃」がどのようなものと認識されていることからくる、どういう気持ちを表現したものか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 意外なものとして人におもしろがられるところからくる、得々とした気持ち。
B 別の用途に役立つとされるところからくる、平穏な気持ち。
C 用が無く捨てられても当然とされるところからくる、おびえた気持ち。
D 時にあわず人に見向きもされないところからくる、寒々とした気持ち。
E 急な折には活躍するものとされることからくる、冷静な気持ち。

〔問三〕 空欄(3)に入るもっとも適当な語を、漢字一字で答えなさい。

〔問四〕 傍線(4)「述ぶる方なくなむ」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 女の子の提案を否定するのがかわいそうだったから、黙っていた。
B 女の子の素直な感想があまりに的を射ていて、返す言葉がなかった。
C 女の子の突拍子もない主張にあきれてしまって、言葉を失った。
D 女の子があまりにかわいらしく文句を言ったから、怒る気になれなかった。
E 女の子が偉そうに言ったことに憤りを覚えて、返事をする気になれなかった。

〔問五〕 次のア～オについて、傍線(6)の和歌に用いられている修辞であればA、用いられていない修辞であればBの符号で答えなさい。

ア 枕詞　　イ 序詞　　ウ 掛詞　　エ 縁語　　オ 本歌取

〔問六〕 傍線(7)「ただ思ふあまりにおのづからいはれたりけるにこそ」と同じ趣旨を述べている箇所を本文中から抜き出し、その最初と最後の五文字を答えなさい。（句読点は一字に数えない）